

西濃農林事務所の普及活動状況 令和4年7月27日現在

今月の重点活動

■土地利用作物 各地で法人化に向け研修会を開催

西濃管内各地では、土地利用型農業を担っている営農組織の法人化に向けた研修会が、ぎふアグリチャレンジ支援センターや市町、農林事務所が連携しながら活発に実施されている。

7月12日には、大垣市の任意組織「洲本ふぁーむ釜笛」が法人化に向けた勉強会を開催した。ぎふアグリチャレンジ支援センターから法人化の概要やメリット、法人形態、法人化までの流れなどの説明を行った後、意見交換が行われた。役員からは、法人化に前向きな意見があった一方、目指すべき法人の姿をしっかりと固めた上で法人化すべきであるなど、慎重な意見も多く出された。今後、役員内での意見交換を進め、方向性を出していくこととなった。

また輪之内町では、7月16日の榎俣北部営農組合の打ち合わせで、中小企業診断士による経営診断が、7月23日の福東営農組合の打ち合わせで、税理士による出資金や法人税、インボイス制度についての研修が行われた。さらに、法人化に伴う資産の移行方法、定款・事業目論見書づくりなど、それぞれの組織の進度に合わせた内容についても検討が行われた。

農林事務所では、今後も集落営農組織の法人化へ向けて、対象の意向や支援のニーズに合わせてきめ細かく支援を継続していく。



【研修会の様子】

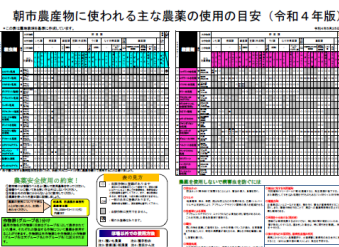
安心で身近な「西濃の食」づくり

■朝市・直売所 農薬使用ポスター配布

農林事務所では西南濃農業普及事業推進協議会（会長：大垣市長）と連携し、「朝市農産物に使われる主な農薬の使用の目安」のポスターを作成し、西濃管内の各朝市・直売所、市町・JA等関係機関へ2,400部を配布した。

朝市・直売所向けの生産者は1ほ場で少量多品目栽培を行うため、品目ごとに農薬登録があるかを確認し、できるだけ多くの作物登録がある農薬を選定して利用している。また、農薬は使用基準がその都度変更されるため、最新の情報を収集しておく必要がある。このため、今年度はイモ類が野菜類に入る等、農林水産省の作物群変更にあわせた改訂を行うとともに、薬剤抵抗性を回避するため、農薬をRACコードごとに分類し、生産者が利用しやすいポスターとした。

朝市農産物に使われる主な農薬の使用の目安（令和4年版）



【農薬使用ポスター】

西濃の農業・農村を支える人材育成

■地域の担い手 「人・農地プラン」の更新に係る検討会の開催

養老町では、「人・農地プラン」を更新するため検討会が開催されており、今年度も各地区で検討会が始まった。

検討会では、現在の農地集積状況を示す地図とプランを出席者で囲み、現状、問題点、解決したい課題及び担い手の意向などについて意見交換がされ、必要なプランの見直しを行った。

農林事務所では、担い手に対し水稻の病虫害発生状況や農業版BCP（事業継続計画）等の情報提供を行った。

このような検討会を継続することが、緊急事態等が発生した場合の事業継続に向けた協力体制にも繋がっていくことが期待される。



【人・農地プラン更新検討会】

西濃の農畜水産物のブランド展開

■大豆 土壌診断に基づく施肥改善による収量向上実証

7月7日、海津市の（農）平原営農において、大豆の収量向上に向けた実証調査を開始した。海津地域では、近年地力低下による大豆の収量低下が顕著となっていることから、今回、土壌診断に基づく加里成分の補給が収量向上に与える影響を実証する目的で、7月7日にPK化成40号を施用し、翌8日に播種作業を実施した。

農林事務所では、設置した実証区と慣行区の生育および収量調査を実施し、収量向上への効果について検証を行い、今後の施肥改善のデータとして生産者へ情報提供を行っていく。



【ソワーによる加里・リン酸の施用】

■なばな 在来品種の採種作業

海津なばな部会では、在来品種と早生品種を栽培しており、概ね3年に一度自家採種を行っている。今年是在来品種の採種年に当たり、6月27日（月）に、部会役員、JA担当者、農林事務所によって脱穀作業を行った。得られた種子は、8月に部会員に種子を配する予定である。

農林事務所では、9月から始まるなばな栽培を、引き続き支援していく。



【なばな種子の脱穀作業】

■カキ JAにしみの養老果樹振興会、南濃柿部会 カキ摘果講習会

7月8日に養老果樹振興会、7月9日に南濃柿部会が、両地区のモデルほ場で、カキの摘果講習会を開催した。

今年は、梅雨が短く、生理落果がほとんどなかったため、着果量が多くなっている。また、梅雨明け直後の猛暑で、すでに日焼け果が多数発生している。

農林事務所からは、生育状況、病虫害防除に関する情報提供を行うとともに、摘果方法についての説明及び実演を行った。

研修会の開催により摘果が徹底され、今年も「赤くて、大きくて、うまい柿」の生産が期待される。



【摘果講習会の様子】

地域資源を生かした農村づくり

■カミツレ 出荷作業が行われる

大垣市薬草組合では、39年前から化粧品や石鹸、飲料などの原料として使用されるカミツレを無農薬で栽培しており、市の特産品にもなっている。

今年は、梅雨の期間も短く、乾燥も十分にでき、品質の良いカミツレ収穫ができた。7月7日と26日、（農）大垣南において、生産者6名と関係者（大垣市農林課、カミツレ研究所、農林事務所）で、乾燥されたカミツレをトラックに積み込む作業が行われた。フレコンで44袋、約4ト（7月7日分）が、長野県にあるカミツレ研究所に輸送された。

農林事務所では、今後も視察研修会の開催など、同組合の活動支援を行っていく。



【トラックへの積み込みの様子】